

I 学校の概要

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現推進モデル校事業 坂出市立加茂小学校

◆児童数及び教員数

○児童数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全校
1学級 24名	1学級 25名	1学級 30名	1学級 26名	1学級 33名	1学級 28名	3学級 9名	9学級 175名

○教員数 13名

◆学校の特徴

本校区は坂出市の南東部に位置し、交通の便のよさから住宅地が増えてきているものの、児童数は緩やかな減少傾向にある。地域の人々や保護者は、本校の教育活動に対して協力的で、健全育成のための様々な取り組みを実施し、PTA活動や体育的活動も盛んである。児童は素直な子が多く、家庭・地域の教育力を得て、心身ともに健やかに成長している。

本校では、令和5年度に、香川県小学校教育研究会国語部会研究発表校として坂出市教育委員会研究指定校等事業を受け、国語教育に係る研究推進を行った。目的や伝えたいことを明確にし、相手意識を大切にしたい言語活動を設定することが、主体的な学びにつながる成果を得た。そして、令和6年度は、「自己選択・自己決定」の場を授業の中に工夫して設定することで、学習の個性化を図ることに取り組んできた。しかし、それが協働的な学びと効果的に結び付き、自己有用感の高まりにつながっているかといえば、充分とは言えない。そこで、今年度は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実をめざすことで、学びの質の高まりとともに自己有用感の醸成が図れるのではないかと考え、研究を推進している。

II 研究主題等

研究主題

他者と関わりながら楽しさを感じ、個が高まる学びづくり

◆研究主題設定の理由

昨年度の研究では、子どもが課題解決に向かって主体的に学習を進めていく姿をめざし、「自己選択・自己決定」の場を工夫して設定する授業づくりを行った。さらに、個を活かす協働的な学びの充実を通して、自己有用感や学ぶ楽しさを実感させる取り組みを推進してきた。

令和6年度の県学習状況調査質問紙調査における肯定的回答を見ると、「分からない問題があるとき、見方や考え方を変えながら、あきらめずに取り組んでいるか」の設問で70.4%（県平均-10.3pt）であり、無回答率も高かった。このことから、課題解決に向けて、様々な見方・考え方を使って粘り強く取り組むことに困難さを感じている児童が多いことが明らかとなった。また、「学級の友だちとの間で話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができているか」の設問に対する肯定的回答は77.8%（県平均+2.2pt）であり、県平均は上回るものの、決して高い割合とはいえない。

そこで、児童が自分のよさを認めるとともに、目を輝かせながら学習や活動に取り組み、課題解決に向かって他者と関わりながら、主体的に学習を進めていく学びをめざしたいと考え、本研究主題を設定した。

◆研究内容及び方法

(1) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けた授業づくり

- ・「授業づくりの三訓」とタブレットPCの効果的な活用を意識して、次の3つの視点で研究授業を行う。
 - ① 子どもの知的好奇心を喚起し、学びがいのある学習課題を設定しているか。
 - ② 「自己選択・自己決定」の機会や場を設定し、児童が課題解決に向かって自己調整しながら学びを深めるプロセスを大切にしたい授業づくりを工夫しているか。
 - ③ 必要感のある協働的な学びの場を設定しているか。

(2) 「個を活かす協働的な学び」をめざした「ふれあい活動」の充実

- ・上級生がリーダーシップを発揮する機会や場を設定する。
- ・他者との関わりを通して自己有用感を高める工夫を行う。
 - ① 縦割り班活動は、5・6年生がリーダーシップを発揮し、関わりを深められる学びの場となっているか。
 - ② かがやき集会は、全校生が活躍し、互いを認め合い、個の変容を捉える場となっているか。
 - ③ 「いいかもね★コーナー」は、児童が楽しんで主体的に取り組むことで互いのよさを認め合い、個の変容を捉える場となっているか。

Ⅲ 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組み

2 (児童質問紙) 授業では学級やグループの中で自分たちで課題を立て、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して発表する学習活動に取り組んでいますか。

指標 「①取り組んでいる+②どちらかといえば取り組んでいる」の合計



指標の達成に向けた実践

○単元ゴールの明確化と児童が探究したくなる課題設定の工夫

第3学年国語科「カモフラージュ発表会を開こう」の実践では、「全校生に向けてカモフラージュ発表会を行う」という単元を貫く言語活動を設定し、児童が単元全体の学習の流れを見通せるようにした。

本時の導入では、前時に学習した「はじめ」「中」「おわり」のうち「中①」を振り返り、まだ解決できていなかった点を想起させながら、児童の発言をつないで学習課題を設定した。また、教室側面に掲示した既習事項を多くの児童が自然に参照し、掲示物が学びを支える役割を果たした。これにより、児童が自ら課題を把握し、主体的に学習に向かう姿が見られた。

今日は、何をやるの？

前の時間に「中1」の部分を読んだから、今日は「中2」を読む！

でも、「中1」を読んでいて、すっかりしていないことがあったんじゃないかな？

まだ、問い1の答えがはっきりしていなかったよ。

「答えを考えたい」って終わったね。「問い1」って、何だったっけ？

...

「問い1」は何段落にあった？

あっ、3段落です！

第2学年算数科「かけざんをつくろう」の実践では、前時の5の段の学習で気付いた「5ずつ増える」というきまりを振り返り、「2の段でも同じことがいえるのか」という学習課題を設定した。「2の段は2ずつ増える！」と自信満々に答えていた児童に対して「本当にそうなのか？」と問い返すことで、児童が立ち止まって考える時間が生まれた。この問い返しが「本当にそうなのか確かめたい」という知的好奇心を喚起し、「写真や図を使って自分で調べよう」という、児童にとって学びがいのある課題へとつながった。

5の段の決まりは？

5ずつ増える。

2の段は？

2ずつ増える

本当に2ずつ増えるの？

えっ・・・

5 学級の友だちと話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができますか。

指標 「①できている+②どちらかといえはできている」の合計



指標の達成に向けた実践

○必要感のある協働的な学びの工夫

国語科では、教師が「教室の中に困っている友だちがいること」を伝え、考えをつくれた児童が自由に立ち歩いて助言したり、教師に質問したりできるようにした。必要感がある時（困っている時、確かめたい時、伝えたい時）のタイミングを見計らって交流の場を設定した。



○タブレットPCを活用した考えの可視化と共有

算数科では、「1つ分は?」「いくつつ増えているの?」という“合言葉”を用いて互いに問い返し、理解を深めた。ワークシートや調べカードを共有し、互いの考えを見比べながら説明する場をつくった。話し合いながらいっしょにタブレットPC上で○をつけたリカードを動かしたりすることで、思考の過程が共有しやすくなった。



第5学年社会科「おいしい米を守れ! 農業について考えよう～米づくりのさかんな地域～」の実践では、学習問題に対する予想を立てた後、タブレットPCの共有機能を使ってグループで予想の分類・整理を行った。言葉を発しながら行うことをルールにしたことで、対話が生まれ、自分では考えていなかった視点を得たり、この後調べていきたいことを一人ひとりが明確に持つことができたりした。



第6学年道徳科「差別を許さない心～未来への裁判～」の実践では、タブレットPC上の心情メーターに、自分ならどの立場に近いのかを示したことで、同じ立場や違う立場を可視化することができた。それぞれの立場の考えをおさえたことで、登場人物の心の葛藤がより鮮明になり、深い心情理解につながった。



このように、交流の目的意識を明確にし、必要感のある協働的な学びの場を設定することで、児童が学ぶ意義を理解し、学びの深まりを実感することにつながった。

8 児童の思いや考えを大切に子ども主体の学びにしていますか。【教員】

指標 「①よく行っている+②どちらかといえば行っている」の合計



指標の達成に向けた実践

○「おかしい」「どうしてだろう」児童の思いを起点にして

道徳科では、人権学習の第一次として、児童が差別や偏見を自分事として捉えることを目的に単元を構成した。導入では、動画とアンケートを用いて児童自身の思い込みに気付かせ、その気付きを出発点として学習課題を設定した。終末では、データを提示し、児童が社会の現状と自分の思いを結び付けて考える機会をつくった。「自分たちが社会をよくしていきたい」という前向きな声が聞かれ、学びへ向かう意欲の高まりを感じた。



【社会の現状を示したデータ】

国語科では、意図的に、5段落と6段落を比較させる（比較①）→4段落と5・6段落を比較させる（比較②）という2段階で比較させることで、4段落だけ、答えとなる文が書かれていないことに気付かせた。そこから、児童は「なぜ、4段落だけ『答え』となる文がないのだろう」という疑問をもったり、「4段落に答えとなる文を入れるとしたらどのような文が適切だろうか」と自ら課題を見いだしたりして、友だちと協働しながら意欲をもって課題解決に向かった。児童の自然な意識の流れで、教科として付けたい力の獲得をねらった学習活動を設定した。

(問い) こん虫は、ほご色によって、どのようにてきから身をかくしているのでしょうか。		
4段落 (答え) (くわしい説明) コノハチヨウの羽は、表はあざやかなオレンジ色ですが、...	5段落 (答え) トノサマバッタは自分の体の色がほご色になるよう色遣いをえらんですんでいるよう...	6段落 (答え) まわりの色がへんかすにつれて、体の色がかわっていきこん虫もいます。
比較②		比較①

【文章構成に気付くための比較思考】

○児童の実態に応じた選択肢の用意と個に応じた支援の工夫

算数科では、写真・図・式の3つの方法を用意し、選ぶことが難しい児童には個別に支援を行った。単元を通して、日常生活場面で見つけたかけ算の写真を撮り



【写真を選択した児童】



【図を選択した児童】



【式を選択した児童】

りためており、いつでもタブレットPCで確認できるようにした。本時では、自分で取った写真と教師が用意した写真から選択できるようにし、いずれかの写真を選択して考えている児童が多かった。このように、児童にとっては2の段は具体をもとに考えることが分かりやすいようであった。すべて具体で考えるのではなく、8の段、9の段と数が大きくなったときに、2の段と比較して、図（半具体）や式（抽象）で表すよさに気付くことができた。

○単元レベルでの学びの構造化

社会科では「調べる→交流→深める」のサイクルを単元全体に配置し、児童が自分の学びを見通せるようにした。個人が選択して追究する時間と、他者と交流し深める時間をスパイラル的に設定することで、児童の興味・関心をより高め、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実を図ることができた。



【児童と立てた学習計画】

◆特徴的な取組み

「個を活かす協働的な学び」をめざした「ふれあい活動」の充実

1. 本活動設定の理由

本校ではこれまで、季節に応じた出来事や行事を題材に、全校で統一したテーマのもと「かもっ子名句・川柳」の創作活動に取り組んできた。しかし、今年度からは児童一人ひとりの感性や個性をより大切に、主体的な表現力を育むことを目的として、活動の在り方を見直した。

新たな取組みでは、児童がタブレットPCを活用し、学校生活の中で「いいな」と感じた風景を自ら撮影し、それに一言コメントを添えて表現物として掲示する活動『いいかもね』を設定した。児童の主体性と感性を尊重しながら、豊かな人間関係と表現力を育むことをめざして、常設コーナー『いいかもね☆ギャラリー』に全校生の作品を掲示している。



【職員室前の
いいかもね☆ギャラリー】

2. 実践の具体

令和7年度、坂出市教育文化祭に学校紹介として『いいかもね』の実践をまとめ展示した。(右「カモ助の加茂小『いいかもね』」)

(1) 事前の活動 (ポートフォリオ)

毎月第3週を「いいかもねウィーク」とし、児童一人ひとりが朝の時間や休み時間を使って写真を撮りためておく活動を設定する。

(2) 当日の活動 (感性を言語化する)

学校生活の風景の中で美しさや面白さを見付け出し、タブレットPCで写真を撮影した後、一言コメントと学年・名前を添える。自分が作成したものの中で、一番良いと思うものを選択し、提出箱に提出する。

(3) 事後の活動 (感性を磨く)

同じ風景でも感じ方や見方が異なることに気付き、他者理解を深めるために、学級内で交流会を行う。また、1～6年生の表現物は職員室前の「いいかもね☆ギャラリー」に掲示する。友だちと感想を共有し合うことで、共感する心を育むとともに、学年を越えて、一人ひとりの見方の面白さに気付き、違いを認め合うあたたかい雰囲気づくりを大切にしている。



【いいかもね☆ギャラリー
に集まる児童たち】

この活動を通して、普段は気付にくい「感じ方」や「見え方」の違いを実感することができた。また、学年によって視点の変化が見られ、児童の成長も感じられた。友だち同士で互いの見方や感じ方の違いを認め合う姿も見られた。今後は、教師も児童と一緒に作品づくりに取り組み、「いいかもね☆ギャラリー」に展示していく。



IV 研究の成果と課題

◆研究の成果について

令和6年と令和7年に実施した児童アンケートの結果では、次の項目で肯定的な回答が増加した。

○「分からない問題がある時、見方や考え方を変えながら、あきらめずに取り組んでいますか」

令和6年：70.4% → 令和7年：76.0% (+5.6ポイント)

○「自分の考えを伝えようと努力していますか」

令和6年：78.3% → 令和7年：80.2% (+1.9ポイント)

話し合い活動を重ねる中で、児童は友だちの考えを受け入れ、自分の考えと比べたり、良いところを取り入れたりする経験を積んできた。その過程で、多様な見方や考え方を学び、思考の幅が広がっている。

また、自己選択・自己決定の場を取り入れるなど、個に応じた支援を行ったことで、児童は自分の「考えるための引き出し」を増やすことができた。これにより、新たな問題に直面しても、くじけずに取り組もうとする姿勢が育ってきたと考えられる。

さらに、令和7年5月と令和7年11月に行った教員アンケートでは、いずれの項目においても肯定的な回答の割合が向上した。

○「児童の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりする発問や指導をしていますか」

5月：81.8% → 11月：90.9% (+9.1ポイント)

○「普通の授業で、児童の学び合う場を取り入れていますか」

5年：63.6% → 11月：81.8% (+18.2ポイント)

この背景には、拡散的な思考を促す発問や、「なぜ?」「たとえば?」「本当にそうなの?」と問い返す指導が定着してきたことがある。こうした働きかけにより、児童が自分の考えに疑問をもったり、立ち止まって考えを深めたりする場面が増えた。

さらに、これらの発問を協働的な学びと結び付けることで、児童は自分と同じ考えや異なる考えに自然と目を向け、多面的に思考する力を伸ばしている。また、学び合いの方法が分かり、状況に応じて学び方を選択できるようになってきたことも成果として挙げられる。

そして何より、研究を通して教師自身が授業の楽しさや手ごたえを実感できるようになっていることが、大きな成果である。

◆研究の課題について

●全ての児童が学び合いに参加できずにいる、タイムリーに支援しきれていない。

☛単元のゴールと単元構成をともに考えることで、児童の思考の道筋をつけやすくする。

☛事前に個に応じた複数の支援を用意しておくことで困り感のある児童に速やかに対応する。

●学習の振り返り時間の確保が難しい。

☛単元計画を立てる際、振り返りを行う箇所を児童と相談して確認しておくことで、少ない時間で対話的な深い学びにつなげる。

☛単元途中で軌道修正を図るための押さえるべきポイントがあった時には、そこで時間をとって振り返りを行い、学力向上をめざす。

●学習意欲や取組み方の向上が認められる一方で、数値的な学力の向上が見られない。

☛今後も学びがいのある学習課題を設定して、主体的な学びを促すとともに、必要感のある学び合いの場を設定する。対話的で深い学びをめざした授業改善を行い、学力の育成を図りたい。